

第 31 回クラシックを楽しむ会

2016 年 4 月 24 日 (日) 18:00～ (2 時間 19 分、休憩除く)

歌劇「椿姫」(ヴェルディ)

会場等：グラインドボーン歌劇場 2014 年 8 月 5、10 日

グラインドボーン音楽祭 80 周年記念

管弦楽：ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団

合唱：グラインドボーン合唱団

指揮：マーク・エルダー

演出：トム・ケアンズ

美術・衣装：ヒルデガルト・ベヒトラー

出演：ヴェネラ・ギマディエワ (ヴィオレッタ)

マイケル・ファビアーノ (アルフレード)

タシス・クリストヤニス (ジェルモン)

ハンナ・ヒップ (フローラ)

エディー・ウェイド (ドゥフォール男爵)

エマヌエーレ・ダグアーノ (ガストン子爵)

グレアム・ブロードベント (グランヴィル)

その他



サロンの客をもてなすヴィオレッタ



ファビアーノ ギマディエワ

クリストヤニス

ギマディエワは注目のロシア人新星ソプラノ歌手。

ファビアーノはアメリカ人若手テノール歌手、**クリストヤニス**はギリシャ人バリトン歌手。**エルダー**はプロムスなどに出演して好評のイギリス人指揮者。

ものがたり

高級娼婦ヴィオレッタと青年貴族アルフレードの純愛物語。誇り高きヴィオレッタが純情で一途なアルフレードの愛を受け入れる。アルフレードの父ジェルモンが現れ、彼の娘のためにアルフレードと別れるよう懇願、ヴィオレッタは泣く泣く犠牲を承諾する。娼婦にもどったヴィオレッタに対して事情を知らないアルフレードは怒りと嫉妬に狂う。胸の病が悪化し死の床に横たっているヴィオレッタに、アルフレードは許しを求め、ジェルモンは罪の大きさを後悔する。

名曲

第 1 幕と第 3 幕の前の「前奏曲」はそれぞれ単独でも演奏される名曲。第 1 幕の「乾杯の歌」、第 2 幕ジェルモンのアリア「プロヴァンスの海と陸」が特に有名だが、その他のアリア、二重唱など名曲がずらり。第 2 幕の「俺たちはマドリードの闘牛士」など歌と踊りも楽しめる。

第 32 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「タンホイザー」(ワーグナー)

5 月 22 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

官能と快楽の世界に溺れた中世の騎士の物語。単独でもよく演奏される序曲と巡礼の合唱、「夕星の歌」など聴きどころ満載。エヴァ・マルトンとタティアーナ・トロヤノスの美声は逃せません。メトロポリタンで指揮はレバイン。(2016 年 4 月、レバイン今期で引退を表明)

6 月は「アイダ」を予定。7 月以降、「ドン・ジョバンニ」、「トゥーランドット」など新演出の名作の他、これまで上映した人気演目の再演も予定。

あらすじ

【時と場所】。

1850年頃のパリとその郊外

【第1幕】 ヴィオレッタの家のサロン

社交界の名士が集まり華やかな宴が開かれる。この宴にやって来た田舎の青年貴族アルフレードは、求めに応じてヴィオレッタの美しさを讃え、皆と一緒に「乾杯の歌」を歌う。彼は以前からヴィオレッタに恋をしていて、二人きりになると彼女に愛を告白する。(ヴィオレッタとの二重唱「思い出の日から」)

ヴィオレッタは娼婦である自分は本当の恋愛などに縁はないと思いながらもアルフレードの純粋な愛に葛藤、アリア「ああ、そは彼の人か～花より花へ」を歌う。

【第2幕】

第1場 パリ郊外の二人が住む家

ヴィオレッタは社交界を離れ、パリ郊外の家でアルフレードと愛の生活を送る。アルフレードはアリア「燃える心を」でその幸福と喜びを歌う。

ある日、アルフレードの留守中に、彼の父ジェルモンが訪ねてくる。ジェルモンは、ヴィオレッタの娼婦という過去が、娘(つまりアルフレードの妹)の縁談に差し障るため、息子と別れるようヴィオレッタに迫る。ヴィオレッタは自分の真実の愛を必死で訴えて断るが、ついに説得され「哀れな女が犠牲になり死んでいった伝えてください」と泣く泣く承知する。

別れの置き手紙を読んだ何も知らないアルフレードは、彼女が裏切ったと誤解して激怒。再びジェルモンが現れ、アルフレードを正気に返らせるため、アリア「プロヴァンスの海と陸」を歌って故郷へ連れて帰ろうとする。しかしアルフレードは復讐心に燃え、ヴィオレッタを追いかけてパリへ行く。

第2場 パリ、高級娼婦フローラの家のサロン

ヴィオレッタはパリの社交界に戻り、かつてパトロンだったドゥフォーール男爵に手を引かれて現れる。彼女を追ってきていたアルフレードは、ヴィオレッタが男爵を愛していると苦しまぎれに言うのを聞いて逆上。彼は大勢の人前で彼女をひどく侮辱して悲しませる。

【第3幕】 パリ、ヴィオレッタの家の寝室

第二幕から2ヶ月が経ち、ヴィオレッタの胸の病は重く死の床についている。ヴィオレッタはジェルモンから届いた手紙を読み始める。約束を守ってくれた感謝、アルフレードが決闘で男爵を負傷させた後、外国へ旅立っていたこと、真実を知った息子が謝罪にいくだろう。ヴィオレッタは「もう遅すぎる」と嘆きアリア「さようなら、過ぎ去った日よ」を歌う。

間もなくアルフレードが駆けつけてきて許しを求め、二人で再会を喜び二重唱「パリを離れて」を歌う。ジェルモンも到着し、ヴィオレッタを娘として迎えるために来たと言うが、ヴィオレッタのやつれた姿に罪の大きさを後悔する。

ヴィオレッタは「アルフレードがつつましく清らかな女性と出会って結婚するなら、ぜひ自分の絵姿を渡し、天上であなた方の幸せを祈っている者からだ」と伝えて欲しい」とアリア「もしもつつましい乙女が」を歌い息を引き取る。

歌劇「椿姫」の背景について

デュマ・フィスの芝居「椿姫」がパリで大当たりをとっていた頃、ちょうどヴェルディは後に後妻となるジュゼッピーナ・ストレッポーニとパリ郊外で同棲していた。「椿姫」を観劇してジュゼッピーナの境遇とマルグリットのそれを重ね合わせて共感し、歌劇の名作「ラ・トラヴィアータ」が生まれたといわれている。

ジュゼッペ・ヴェルディについて

ヴェルディが貧しかった少年時代に町の有力者だった商人バレッツィが物心ともに支援しミラノで音楽を勉強させた。そしてバレッツィの娘と結婚させ2人の子供ができた。バレッツィはまさに大恩人である。ところが2人の幼い子供が相次いで病死し、続けて妻も病死してしまった。失意のどん底にあったとき、ヴェルディの最初のヒット作「ナブッコ」の初演で主役を歌ったスカラ座のプリマドンナ、当時歌手を引退してパリで音楽教師をしていたジュゼッピーナがヴェルディを励まして同棲するにいたった。

ジュゼッピーナ・ストレッポーニについて

ジュゼッピーナは、ミラノ音楽院で優等の成績を取めた。オペラの共演者やスカラ座の支配人達と関係して少なくとも3人の父親の異なる私生児を生んだ。その後40歳近くになって垢ぬけしないヴェルディに出会った。

上述のようにパリ近郊でヴェルディと同棲するに至ったがヴェルディの故郷では当然白い目で見られ長い間村八分状態だった。

1853年の「ラ・トラヴィアータ」初演後、1859年になってヴェルディと結婚した後妻となった。ヴェルディ45歳、ジュゼッピーナ43歳のときである。その後のヴェルディを献身的に支え続けた。現在も世界でただ一つ存在する、年老いた音楽家が共同で生活し、人生を全うするための「音楽家憩いの家」を二人で設立した。

補足. 日本で歌劇の名称に「椿姫」を用いることになった経緯は不明。日本ヴェルディ協会は歌劇の正式な名称を「ラ・トラヴィアータ」(道を踏み外した女、墮落した女)としている。



ヴェルディ



ジュゼッピーナ

小説「椿姫」原作者デュマ・フィスとその家系について

曾祖父の侯爵がカリブ海のハイチでプランテーションを営んでいたとき、農場を切り盛りしていた黒人奴隷女性、通称「農家のマリー」に産ませ、奴隷として売り飛ばし後に買い戻した子が**祖父トマ＝アレクサンドル・デュマ**(1762-1806)である。デュマ Dumas 姓はこの「農家の」du mas に由来する。トマ＝アレクサンドル・デュマはナポレオン軍の陸軍中將にまでなったがナポレオンのエジプト遠征を批判して失脚、祖父の死後ナポレオンの人種差別政策のため遺族は年金支給を拒否された。

このため**父アレクサンドル・デュマ・ペール**(ペールは「父」)(1802-1870)は困窮生活を余儀なくされ学校教育も受けられなかったが「ハムレット」の劇を見て感動して作家を志し、三銃士、モンテクリスト伯等を書いてベストセラー作家になった。劇場も経営して巨万の富を手にし、豪快で派手な生活を繰り広げたが、晩年は浪費のため破産宣告をうけた。2002年になって生誕200年を期にパリのパンテオンに祭られた。人種差別等が原因で100年遅れたものである。

「椿姫」原作者の**アレクサンドル・デュマ・フィス**(フィスは「息子」)(1824-1895)は父アレクサンドル・デュマ・ペールの私生児である。父アレクサンドル・デュマ・ペールに認知されて最高の教育を受けた。母と引き離され、思春期に受けた周囲の偏見、その後の父親の金で遊び呆けた経験などが作品に影響している。1848年24歳で処女作「椿姫」を父親の七光りで出版し、翌年戯曲化して大成功を取めた。女性解放運動など人権活動家として活躍し、演劇界で絶大な影響力を持つなどしてアカデミー・フランセーズ入りを果たした。

補足. 原作の題名「椿姫」は「椿の花の貴婦人」の意識である。



祖父アレクサンドル・デュマ



父デュマ・ペール



デュマ・フィス

小説「椿姫」のモデルについて

小説「椿姫」は娼婦マルグリットと青年アルマンとの悲恋の物語である。

娼婦マルグリットのモデル

娼婦マルグリットは実在の女性、1824年生まれの通称マリー・デュプレシ、本名アルフォンシーヌ・プレシがモデルである。極めて不幸な少女時代の後、7人の富豪達から金を絞り取る才色兼備の高級娼婦になった。20歳で知り合ったデュマ・フィスと別れた後、死の前年22歳の時、時代の寵児フランツ・リストに熱を上げたが、不治の病、肺結核のため多額の借金を残して23歳で亡くなった。その死は大きく報道されて有力紙にも追悼記事が載った。

小説、戯曲ではマルグリットが娼婦の生活を捨て一途にアルマンを愛する純愛物語に仕立てているがこれは事実ではない。デュマ・フィスの願望を物語に仕立てたものである。

※マルグリットは歌劇ではヴィオレッタである。

マルグリットのパトロンモデル

上記富豪の内、薄幸の少女に教育を受けさせるなど知性を身に付けさせたギッシュ伯爵ともう一人、エドワール・ド・ペレゴ伯爵が原作の重要なモデルである。ペレゴ伯爵は銀行家の孫で、相続した莫大な遺産をデュプレシに入れあげて破産状態になった。請われるままにロンドンで「娼婦と貴族の正式な」結婚式を挙げデュプレシを「伯爵夫人」にした。デュプレシの死の前年のことである。デュプレシの「本当はフランツ・リストを愛している」の言葉に怒り裁判所に結婚の無効を申し立てて勝訴したが「元伯爵夫人」の虚名が残りデュプレシの使用する道具に伯爵の家紋が付いた。それでもデュプレシの死の直前に和解、その死に立会い、立派な墓を作り一生独身を通した。

※ペレゴ伯爵は小説ではG伯爵、歌劇ではドゥフォール男爵である。

青年アルマンのモデル

デュマ・フィス自身が主要なモデルであるがペレゴ伯爵もモデルの一部になっている。歌劇の第1幕に相当する部分はほとんどデュマ・フィスの経験に基づいている。デュプレシが亡くなったとき、デュマ・フィスは父ペールと旅行中だったため、死に立ち会えなかったのも事実である。アルマンが墓を掘り返すところはペレゴ伯爵に相当する。

※アルマンは歌劇ではアルフレードである。



マリー・デュプレシの肖像



劇場のマリー・デュプレシ

参考資料.

善本知孝のイタリア・オペラ史 (133) 「椿姫」、裏にある物語(1)から抜粋

デュマ・フィスが小説「椿姫」を書いたのは、自らの経験だった、と彼は自分で言っています。「ものを書くのはたやすいことだ。20歳のときに少し辛い体験をする、それだけで十分である。あとはその体験の辛さをそのまま語ればよいのだ。」原作は、作者デュマの体験談ではなく、作者がマルグリード（マリーの作中名）の相手となった青年（アルモン）から聞いた話という構成をとっています。実在したマリーの話しに思いをいたします。マリー・デュプレシーとデュマの出会いは1845年です。

マリーはノルマンディ出身の行商の娘。優れてあどけない美人。彼女の容姿をデュマはこう表現しています。「小さな顔に、まるで日本の女のような切れ長の、エナメルのような目がついているが、しかしその輝きは強く鋭かった。唇のさくらんぼの紅色から覗く白い歯はこの世のものとは思えないほど美しい。まるでマイセン磁器の人形をそこに立てかけたかのようなのである。」

ヴァリエテ座で彼女をみて、彼が積極的にマリーを友と訪ねたのは、当日の夜でした。彼女をみたのは数ヶ月前、取りまき連に囲まれたマリーの家に入り、ここで始まったのが「トラビアータ」の冒頭の場面そっくり、彼女は血を吐いて退席し、後を追う初対面のデュマ、デュマとマリーは彼の執拗な求愛で、数日で結ばれました。オペラと違うのは、彼女を見たのが1年前、再会の合図が椿が萎む時ではなく胸の椿が赤から白に変わる日でした。作品に誇張があります。しかし同年8月には二人の間に秋風が吹いた事実が残っています。二人はマリーの死まで交誼はありましたが、作品のように熱烈な愛が続いたわけではないようです。同年10月にはデュマは別れたと公言しています。それを裏付けるかのように、マリーは同年11月に大作曲家で大ピアニストでもあるフランツ・リストに熱を上げ、リストも熱を上げています。1845年4月16日パリに登場したリストは超人的演奏で全女性を魅了しました。11月からの恋のシンホニーは3ヶ月続きます。リストはワイマールの聖歌隊指揮者に任命され、国に帰らざるをえなくなったとき、マリーはリストについてワイマールに行きたいと手紙を書いています。「あなたなしでは生きていけません。私は変な娼婦です。自分ではかえることができない、しかしどうしても耐えることのできないこの生活がすっかり嫌いです。私はあなたのものです。・・・」(1846年)これもヴェルディが惹かれそうな性格ですね。

彼女の肺結核がひどい状態にあるのを知ったリストはそれ以上の関係に進むのを避けたようで、彼は「翌年(1847年)春にウィーンへ演奏旅行があるから、その帰りに一緒にボスポラス海峡の都、イスタンブールへ旅をしよう」と返事をしています。1846年はマリー22歳、この年、マリーは突如結婚します。相手はかつてからマリーに熱を上げていた伯爵エドワール・ド・ペレゴ。二人はイギリスで正式に結婚し、マリーはデュプレシー伯爵夫人となります。婚姻後、マリーは真実をペレゴに告げます。本当はリストを愛しているのだと。これを聞いて、婚姻がなかったものとする裁判が起され、ペレゴが勝訴しました。しかしマリーには、前歴として元伯爵夫人の虚名が残り、使用する道具に伯爵の家紋がつけました。そして彼女はリストの来る春を待ちます。この間の事情はデュマの「椿姫」にはありません。肺の悪化は急速にすすみ、9月頃から医者への往診が頻度をまして、1847年を迎えます。その間に親しい友はあるものは離れるが、あるものは見舞いの頻度をまし、そして死。47年2月の葬儀に参加した人も程ほどだったといえます。デュマはマルセユにいて、間に会わなかったそうです。間に合わせようとしなかったのかもしれませんが。「椿姫」とは大違いですが、戯曲では死に間に合うよう改変しています。デュマが「椿姫」を書いたのは1848年です。これを5幕物の戯曲とし公演出来たのは1852年です。このようにみると、マリーは娼婦という職業から逃れたいという強い意志をもっていたのは確かです。ヴェルディは「間違っただに落ちた女の再生への努力」に焦点を置いて「椿姫」を書いていると私には思えます。